

すると考えられる。鈴木ら (1955) の温度別ふ化率実験結果より低温になるとふ化率が低下する。

増殖期の関与要因 第5月中旬～6月下旬に植付後低温が多い場合産卵、卵、幼虫の好適条件から加害発生を促進する。

IV 摘 要

1) 最近発生が多くなつたイネヒメハモグリバエの生態ならびに発生気象要因について検討する。

2) 越冬態は幼虫及蛹のようである。

3) 雑草より苗代への飛来は毎年大体一定期にピークが現われ、発生量は当年発生量と関係があると考え。予察的意義がある。

4) 本田初期には世代は重なり合い、成虫が早植より順次植付直後に多く飛来産卵する。

5) 年間の世代数は7～8回位のようにある。

6) 発生気象要因は前年夏の降雨頻度、積雪日数、4月上旬平均気温等が関係深い。予察的意義がある。

引用文献

- 1 桜井清, 松本嵩, 富岡暢 (1955) 北日本病虫研会特報: 15
- 2 鈴木忠夫, 湖山利篤 (—) —: 25
- 3 大森秀雄, 大矢剛毅 (—) —: 33
- 4 遠藤正, 菅野登 (—) —: 50
- 5 湖山利篤, 鈴木忠夫 (—) —: 54
- 6 富岡暢 (—) —: 70
- 7 上田勇五 (—) —: 160
- 8 友永留 (—) —: 173
- 9 福井県立農事試験場 (1952～61) 病害虫発生予察事業年報

穂イモチに対する品種の抵抗性検定方法に関する研究

噴霧接種時期と発病との関係 (予報)

鈴木 幸 雄

(農林省北陸農桑試験場)

穂頭および枝梗などへのイモチ菌の侵入は、出穂直後に最も多く、数日を経過すれば殆んど侵入は行なわれなくなるという試験成績と、出穂後相当長期間にわたつて菌の侵入が行なわれる、という試験成績があるが、イモチ菌の孢子液を噴霧接種して品種の抵抗性検定を行なう場合、菌の侵入が前者のように、出穂直後の短かい期間に限定されるとするならば、噴霧接種もそれに促応した適期に行なわなければ効率的でない。著者は、穂イモチに対する品種抵抗性検定法の確立をはかるため、以上の点をたしかめ、最も有効適切な噴霧接種時期を決定しようとして試験を行なつた。

供試品種として農林43号とアツサを用い、出穂期12日前、6日前、出穂期(8月23日)、6日後、12日後の5時期に、それぞれ、1回噴霧接種を行なつたもの(試験Ⅰ)と、1株内各茎の出穂日をラベルして、1定時期に同時に噴霧接種したもの(試験Ⅱ)の、2区を設けて試験し

た。

その結果、試験Ⅰでは、出穂期6日前接種区から日数を経過するに従い、穂イモチの発病が多くなり、本試験の最終回接種区、すなわち、出穂期後12日目に接種した区が発病穂率および発病度が最も高かつた。また、試験Ⅱの場合、出穂日をラベルした10日間の内では、出穂前、および、出穂直後より、出穂後3日～5日間経過した穂に菌の侵入が多く、また、発病度も高かつた。なお、両試験を通じ、発病穂率と発病度とは概ね併行関係を示し、また、品種間では、農林43号はアツサに比較し、常に感受性であつた。

以上の試験結果は、出穂後相当長期間にわたつて菌の侵入が行なわれるという試験成績と同様な傾向を示すものであるが、再度検討を行ない、適切な噴霧接種時期を決定したい。